ジュリアン・H・スチュワードにおける「文化」と「文明」

――「多線進化論」から「近代化論」へ――

沼　崎　一　郎

は じ め に

本稿の目的は，ジュリアン・ヘインズ・スチュワード（Julian Haynes Steward）の人類学的思想における「文化（culture）」概念と「文明（civilization）」概念を検討しつつ，彼の文化変化論の学説史的意義を再検討することである。

スチュワードは，1902 年，首都ワシントンに生まれた[1]。幼少期を首都の郊外で過ごした後，16 歳でカリフォルニア州デスヴァレー近郊の牧場に創設されて間もないディープ・スプリングス寄宿学校（現ディープ・スプリングス大学）に進学した。この地でスチュワードは，東部とは全く異なる西部の気候風土の中で，学校近くに暮らす先住民パイユート人（Paiute）やショショニ人（Shoshoni）の生活文化に触れた。カリフォルニア大学バークレー校に進学したスチュワードは，アルフレッド・クローバー（Alfred Kroeber），ロバート・ローウィ（Robert Lowie），エドワード・ギフォード（Edward Gifford）が合同で担当する授業を通して初めて人類学を知る。しかし，スチュワードは東部のコーネル大学に転学し，動物学と地理学を修める。大学院では再びカリフォルニア大学バークレー校に戻り，クローバーらの指導下，当時のボアズ学派の視点と方法を用いた「アメリカインディアンの儀礼的道化（The Ceremonial Buffoon of the American Indian）」と題する論文によって 1929 年に博士学位を取得している。

スチュワードは，1928 年からミシガン大学，1930 年からはユタ大学，1935 年からは首都ワシントンのアメリカ民族学局（Bureau of American Ethnology）に勤務した後，

[1] 以下の記述は，主に Murphy（1977, 1981），Manners（1996）に依る。より詳細な伝記として，Kerns（2003）がある。本書は，スチュワードのジェンダー観とその制約が彼の人間関係と研究教育に与えた影響を重視している点で興味深い著作となっている。

1946 ～ 52 年にはニューヨーク市のコロンビア大学，1952 年から死去する 1972 年まではイリノイ大学で教育と研究に従事した。ミシガン大学時代には同校で初めて人類学を講じ，ユタ大学時代にはプエブロ諸文化の考古学的調査とカリフォルニア州・ネヴァダ州・アイダホ州・オレゴン州での先住民の民族誌的調査を行なっている。アメリカ民族学局時代には，局内に社会人類学研究室（Institute of Social Anthropology）を創設，『南アメリカインディアン諸族便覧（Handbook of South American Indians）』全 6 巻の編集と出版を主導し，ペルー北部海岸の考古学的発掘調査を指導している。コロンビア大学の在職期間は 6 年ほどに過ぎないが，ここでスチュワードは後に著名となる多くの人類学者を育てており，彼らをフィールドワーカーとして，ある一地域を総合的かつ組織的に調査することを試みている。これが, 1947 ～ 49 年に行われたプレルトリコ研究である。その成果は，1956 年に『プエルトリコの人々―社会人類学における一研究（The People of Puerto Rico : A Study in Social Anthropology）』と題して刊行された（Steward et al. 1956）。その前年には，1936 ～ 53 年に発表された主要論文を集め，加筆修正を施した主著『文化変化の理論―多線進化の方法論（Theory of Culture Change : The Methodology of Multilinear Evolution）』（Steward 1972［1955］）が刊行されており，1950 年代半ばにスチュワードはアメリカ人類学において確固たる地歩を築いたと言える。イリノイ大学時代の最も大きな業績は，「文化的諸規則性の諸研究（Studies of Cultural Regularities）」と題するプロジェクトにおいて，近代化に晒されたアフリカ・アジア・ラテンアメリカの部族社会・農村社会に見られる変化の比較研究を 1957 ～ 59 年に実施し[2]，その成果を『伝統的諸社会における現代的変化（Contemporary Change in Traditional Societies）』全 3 巻として 1967 年に刊行したことであろう（Steward Ed. 1967）。スチュワードは，『文化変化の理論』の大幅な改訂を意図していたことが『伝統的諸社会における現代的変化』第 1 巻の「前言」に記されているが（Steward 1967a : ix），改訂版が生前に出版されることはなかった。これに代えて，『文化変化の理論』に収録されなかった論考から重要な 17 篇を選び，弟子のロバート・マーフィ（Robert Murphy）の序論を付した論文集が『進化と生態―ジュリアン・H・スチュワードによる社会転換に関する諸論（Evolution and Ecology : Essays on Social Transformation by Julian H. Steward）』と題して 1977 年に刊行されている（Steward and Murphy 1977）。

[2] 日本からは米山俊直が参加している。

本稿では，主に 1955 年の『文化変化の理論』と 1977 年の『進化と生態』に収められた諸論考に基づき，スチュワードの構想した文化生態学と多線進化論および地域研究と近代化論の特色を明らかにすることを通して，彼の学説史上の貢献と限界を検討したい。

読者は既にお気づきであろうが，スチュワードの “multilinear evolution” は通常「多系進化」と訳されるところ，筆者は敢えて「多線進化」と訳している。その理由の詳細は次節で明らかにするが，簡潔に述べると，「多系進化」という日本語は「枝分かれ進化」すなわち一本の線が方向を異にする複数の線に分岐していく形の進化あるいは起源の異なる進化の道筋が複数存在することを連想させがちであるが，スチュワード自身はそのような意味で “multilinear evolution” という語を用いてはいないというのが最大の理由である。スチュワードの主眼は異なる文化における平行進化にあり，“multilinear” という語は 2 本またはそれ以上の「多数の平行線」を意味しているのである。

スチュワードは，前稿（沼崎 2021）で取り上げたレズリー・ホワイト（Leslie White）とともに，ボアズ学派と対峙しつつ，法測定立的で進化論的な人類学を志向し，1960 年代以後のアメリカ人類学の方向性に大きな影響を与えた。加えて，前々稿（沼崎 2020）で取り上げたロバート・レッドフィールド（Robert Redfield）とは異なる形の地域研究・農民研究を開拓している。第二次世界大戦後のアメリカ人類学を主導した一人として，大いに注目に値するのである。

Ⅰ　文化生態学と多線進化論

『文化変化の理論』の冒頭で，スチュワードは本書の目的を次のように記す（Steward 1955：3）：

> My purpose in this collection of essays is to develop a methodology for determining regularities of form, function, and process which recur cross-culturally among societies found in different cultural areas.

「異なる文化領域に属する諸社会において」すなわち文化の違いを超えて「繰り返し生起する」諸々の規則性すなわち再現可能な法則性を確定する「一方法論」を練り上げることをスチュワードは目指す。それは，そのような規則性ないし法則性こそが，文化

を「説明」するからである。

そして，スチュワードは，「文化発達（cultural development）」の体系的な説明には，全ての社会が類似の発達段階を経て進化するという「単線進化（unilinear evolution）」論，文化発達の過程を基本的に「分岐的（divergent」と捉えて文化の差異化に注目する「文化相対主義（cultural relativism）」，スチュワードが本書で提起する「多線進化（multilinear evolution）」論の 3 つがあると言う（Steward 1955 : 4）。多線進化とは「文化のある種の基本的な諸類型は，類似の諸条件の下では類似の諸方式で発達しうる（certain basic types of culture may develop in similar ways under similar conditions）」が「人類の全ての諸集団においてある規則的な順序で現れる文化の具体的な諸側面はほとんど存在しない（few concrete aspects of culture will appear among all groups of mankind in a regular sequence）」という考え方である（Steward 1955 : 4）。

さらにスチュワードは，文化的な規則性は，通時的にも共時的にも定立されうると言う（Steward 1955 : 4）：

> The cultural patterns and causal interrelations which may develop repeatedly in different parts of the world and thus constitute cross-cultural regularities are subject to both synchronic and diachronic formulations.

その両方を可能にするのが，文化生態学（cultural ecology）の概念と方法であり，これを用いて変化の規則性を説明するのが多線進化（multilinear evolution）の理論である。それゆえ，『文化変化の理論』の章立てとは順序が逆になるが，先ずスチュワードの提唱する文化生態学を検討し，次に彼の多線進化の理論と例証を検討することとする。

1.　文化生態学の概念と方法

第 2 章「文化生態学の概念と方法」（Steward 1955 : 30-42）においてスチュワードが唱える文化生態学は，「異なる諸地域を特徴づける特定の文化的諸特徴と諸様式の起源を説明するために（to explain the origin of particular cultural features and patterns which characterize different areas）」，「文化外的要因としてその地域の環境を導入し（introduces the local environment as the extracultural factor）」，「文化的に処方された諸方式での環境の利用…に主要な関心を払う（pays primary attention to … the utilization of environment

in culturally prescribed ways)」(Steward 1955 : 36-37)。

そのために，スチュワードは「文化核（cultural core)」すなわち「諸生業活動と経済的諸編成に最も緊密に関係した諸特徴の配置（the constellation of features which are most closely related to subsistence activities and economic arrangements)」という概念を導入する（Steward 1955 : 37)。文化核には，環境の利用に密接に関係する限りにおいて「社会的，政治的および宗教的諸様式（social, political, and religious patterns)」が含まれる（Steward 1955 : 37)。スチュワードは，環境の利用，特に食料獲得に結びついた文化要素を重視するわけである。

そしてスチュワードは，文化生態学の研究手続きは，次の 3 段階を辿ると述べる (Steward 1955 : 40-41) :

> First, the interrelationship of exploitative or productive technology and environment must be analyzed. … Relevant environmental features depend upon the culture. …
>
> Second, the behavior patterns involved in the exploitation of a particular area by means of a particular technology must be analyzed. …
>
> The third procedure is to ascertain the extent to which the behavior patterns entailed in exploiting the environment affect other aspects of culture. … The third procedure requires a genuinely holistic approach, for if such factors as demography, settlement pattern, kinship structures, land tenure, land use, and other key cultural features are considered separately, their interrelationships to one another and to the environment cannot be grasped.

第一に，「資源利用的すなわち生産的な技術（exploitative or productive technology)」と環境との関係が分析されなければならないが，そこでどのような環境要因が分析に入るかは文化によって異なるという点が重要である。ある特定の文化を持った人間集団が前提され, その集団にとって重要な環境要因が明らかにされなければならないのである。

第二に，「特定の技術による特定の地域の資源利用（the exploitation of a particular area by means of a particular technology)」に必要な行動の諸様式が分析されなければならない。たとえば，女性による種子の採集は協力という行動様式を必要としないが，男性による狩猟は協力という行動様式を必要とする場合があるとスチュワードは述べる (Stew-

ard 1955 : 40)。そして，協力が有効かどうかは，どのような狩猟技術が用いられるかという文化的要因と，どのような性質を持つ動物種が狩猟対象となるかという環境的要因に依存するとも述べる（Steward 1955 : 40)。どこまでも民族誌的に，技術と資源利用と行動様式の関係が明らかにされなければならないのである。

第三に，以上の分析によって明らかにされた特定の資源利用に必要な（特定の資源利用を可能とする）行動様式が，文化のどの側面にどのような影響を与えているのかが，あるいは文化のどの側面とどのような機能的関係を有しているのかが，「総体的（holistic)」に分析されなければならない。こうして，文化核を構成する社会的・政治的・宗教的諸要素が実証的に明らかにされるというわけである。

そして，類似の文化核を有する諸文化が同一の「文化類型（cultural type)」に分類される（Steward 1955 : 42)。文化類型は，また類似の「社会文化的統合の水準（level of sociocultural integration)」になければならないのであるが（Steward 1955 : 42)，この点については地域研究の文脈において検討することとする。

第 2 章「文化生態学の概念と方法」で提唱した方法論が最も忠実に適用された例が，1936 年の論文「未開バンドの経済的および社会的基礎」(Steward 1936）を発展させた第 7 章「父系バンド」であろう（Steward 1955 : 122-142)。

父系バンド（patrilineal band）とは，父系血縁関係で結ばれた男子と彼らが構成する核家族の小規模な集合体である。スチュワードは，この社会組織形態が，特定の狩猟技術と特定の環境要因によって説明できると主張する。南アフリカ，中央アフリカ，フィリピン，タスマニア，カリフォルニア，ティエラデルフエゴという 6 つの異なる地域の狩猟採集民を比較して，スチュワードは，「資源利用の諸様式（exploitative patterns)」の同一性を見出す。6 地域の自然環境は大きく異なるが，共通の環境要因としてスチュワードが指摘するのは，限られた食料資源が散在していること，散在する資源が狩猟動物であること，そしてその動物が季節移動をしない小動物であること，以上の 3 点である（Steward 1955 : 123-124)。技術的な要因として指摘されるのは，用いられる狩猟道具が多様でありながら，その効率がほぼ共通だという点である（Steward 1955 : 124)。これが，文化生態学の分析手続きの第一段階の結果である。

上記の環境要因と技術要因は，狩猟における協力を要請する。狩猟の担い手は男性であるので，男性同士の協力関係が必要となる（Steward 1955 : 124-125)。これが第二段階の分析だ。

協力しやすいのは同じ父親の下に生まれた兄弟たちであり，協力のために彼らは結婚後も父方に居住し続け，やがて父系血縁観念が発達し，内婚の禁忌が生まれ，バンド外婚が制度化されて，父系バンドが形成され，さらに父系バンドが狩猟する地域に対する所有観念が生まれる（Steward 1955 : 124-126）。そして，協力関係が要請されるのが狩猟に限られるということから，政治的なリーダーシップは発達せず，多くの諸活動に影響力を持つシャーマンよりも弱いものとなる（Steward 1955 : 126）。これが第 3 段階の分析である。

スチュワードによれば，父系バンドは，第一に「父系制，父方居住制，外婚制，土地所有とリネージ組成（patrilineality, patrilocality, exogamy, land ownership, and lineage composition）」という「本質的諸特徴（essential features）」が「文化核（cultural core）」を構成する「文化類型（cultural type）」であり，第二に通文化的に出現するこの文化核は一定の諸条件の下での生態学的適応の結果として説明できるのであり，そして第三に複数家族が親族関係のみならず狩猟における協力関係でも結合しているという点で家族レベルよりやや高次の「社会文化統合のレベル」を示す（Steward 1955 : 122）。このようにして，これら 6 地域における父系バンドの発達が文化生態学的に説明され，共通の原因が共通の結果を生じるという文化的規則性が示されるのである[3]。

2.　多線進化の理論

第 1 章「多線進化―進化と過程」（Steward 1955 : 11-29）では，先ず文化進化とは何かが生物学的進化論とボアズ学派の文化相対主義・歴史個別主義（historical particularism）[4] との対比において論じられる。

スチュワードによれば，生物学的進化論は形態学的特徴の遺伝的関係を前提に種の系統的分化すなわち「分岐進化（divergent evolution）」の解明を主目的とし，飛行や游泳といった機能を果たすための異なる種間の形態学的類似すなわち「諸平行（parallels）」は「収斂進化（convergent evolution）」の例として問題化されることはあっても決して

[3] スチュワードの父系バンド論は，その後の人類学的な狩猟採集研究に大きな影響を与えた。しかし，現在ではスチュワードの議論に対しては多くの批判がある。その詳細については，エルマン・R・サービス（Elman R. Service）の文化進化論を取り上げる次稿において検討する予定である。

[4] ボアズ学派を歴史個別主義と呼んだのはスチュワードが最初ではないかと思われる。歴史個別主義というラベリングは，コロンビア大学でスチュワードに師事したマーヴィン・ハリス（Marvin Harris）の著作『人類学理論の興隆』（Harris 2001［1968］: 250-289）を通して広く知られるようになる。

主要な課題ではないのに対して，文化進化論においては直接的な関係を持たない文化が類似の段階を経て発達するという「平行」が主要な関心事となっている（Steward 1955 : 12）。文化の差異化ないし分岐に関心を寄せるのは，文化相対主義・歴史個別主義であって，文化進化論ではない（Steward 1955 : 13-14）。

文化進化を論じる前提として，次の 2 点をスチュワードは掲げる（Steward 1955 : 14）：

> The methodology of evolution contains two vitally important assumptions. First, it postulates that genuine parallels of form and function develop in historically independent sequences or cultural traditions. Second, it explains these parallels by independent operation of identical causality in each case.

異なる時代，異なる地域，異なる文化伝統において，文化の形態と機能の平行進化が見られことがあり，その進化の平行性は同一の因果関係に起因するという前提に立つのが文化進化論だとスチュワードは宣言するのである。文化進化論とは「文化的諸規則性ないし文化的諸法則の一探究（a quest for cultural regularities or laws）」なのである（Steward 1955 : 14）。

その探求の仕方は，しかしながら研究者によって異なる。全ての社会が類似の段階を経て進化するという「単線進化（unilinear evolution）」論はモルガンやタイラーによって代表され，そこでは文化の違いは発達段階の違いに還元される（Steward 1955 : 15-16）。レズリー・ホワイトやゴードン・チャイルド（V. Gordon Child）は，個別文化の差異を捨象して人理全体の文化の単線的発達を論じる「普遍的進化論（universal evolutionism）」を展開する（Steward 1955 : 16-18）。これらに対して，スチュワードの唱える「多線進化（multilinear evolution）」は，文化の違いを発達段階の違いに還元せず，また文化の違いを捨象せず，「経験的な妥当性を有する，形態，機能および連鎖の限定的な諸平行（those limited parallels of form, function, and sequence which have empirical validity）」を扱う（Steward 1955 : 18-19）。多線進化論は，いわば特殊的かつ限定的な文化進化の法則性を見出そうとするのである（Steward 1955 : 22）：

> The kinds of parallels and similarities with which multilinear evolution deals are distin-

guished by their limited occurrence and their specificity.

言い換えると，類似の初期条件のセットが与えられ，類似の過程を経て，類似の方向の変化が生じる場合にのみ，共通の因果関係が見出されるというわけである。したがって，見出された因果関係によって説明される変化は限定的であるが，変化の方向性は一定で平行し，それゆえ規則性ないし法則性が認められるのである。複数の異なる社会ないし文化の変化について平行線が 2 本以上引ける場合が限定的に認められるとスチュワードは言うわけだ。筆者が “multilinear evolution” を「多線進化」と訳す所以である。

方法論としての多線進化論は, かつてボアズによって否定された「比較法（comparative method）」の限定的な復活と言えよう。単線進化論や普遍的進化論のように比較法を過度に一般化して使用することはできないが，文化生態学の概念と方法を用いるなら限定的に適用できる事例を見出すことができるというのがスチュワードの主張である。それでは，彼はどのような多線進化を見出したのだろうか。

3.　多線進化の例証

『文化変化の理論』に収録された論文の中では，第 9 章「リネージからクランへ―南西部社会の生態学的諸側面」（Steward 1955 : 151-172）と第 11 章「複雑諸社会の発達―初期諸文明の発達に関する一試論的定式化」（Steward 1955 : 178-209）が多線進化の具体例を論じている。

第 9 章「リネージからクランへ―南西部社会の生態学的諸側面」（Steward 1955 : 151-172）では，アメリカ大陸南西部のユーマン人（The Yuman）に関する民族誌的研究と，プエブロ遺跡の考古学的調査結果とが比較され，両者が同種の過程を経てリネージ組織をクランに発展させたという仮説が提示される。その過程とは，生産力の低い段階では人口が少なく，親族組織は父系または母系のリネージ組織に留まっているが，生産力の増大に伴って人口が増加し，同一地域内で複数のリネージ集団が共住する集落が発達，戦争などの要因によって地域間移住が起きて地域的な紐帯を失ったリネージ集団が混住する大集落が出現すると, 集団がクランに合同する場合があり, 政治的な自治権がリネージからクランに移転されることがありうるというものだ。

第 11 章「複雑諸社会の発達―初期諸文明の発達に関する一試論的定式化」（Steward 1955 : 178-209）は，メソポタミア，エジプト，中国，中米メキシコおよびマヤ地域，

南米ペルーの5地域を比較して，初期文明の発達過程の法則性を定式化しようと試みる。スチュワードは，先ず，先農業期（Pre-Agricultural Era）→萌芽的農業（Incipient Agriculture）→基礎的諸技術と郷民文化の形成期（Formative Era of Basic Technologies and Folk Culture）→領域的発達と開花期（Era of Regional Development and Florescence）→周期的征服（Cyclical Conquests）という同一の発展過程を経て初期帝国が形成されたという「発達的諸規則性（developmental regularities）」を類型化し，次いで，カール・ヴィットフォーゲル（Karl Wittfogel）の東洋的専制論に触発されつつ，乾燥ないし半乾燥地域における灌漑農業の導入→生産力の増大と人口増加→灌漑システムの維持管理のための政治的統制の必要→国家の出現と剰余生産によって維持された支配階層による神政→軍事化と征服戦争という初期文明共通の発達メカニズムに関する仮説を導出する[5]。

ここで，スチュワードの仮説が妥当か否かは問わない。重要なのは，彼が，類似の初期条件を備え，かつ類似の変化が見られる文化については，文化生態学的な比較を行うことで，その発達過程に規則性を見出すことができることを民族誌的，考古学的，歴史的に実証しようと試みていることである。

4.　進化の多線性とは？

繰り返すが，スチュワードの多線進化とは，歴史的なつながりを持たない，すなわち系統を異にする2つ以上の文化において，独立に，同一の諸原因が同一の諸過程を経て同一の諸結果を生じるという平行進化を指し示す概念である。それは，文化の多様性と多数性を前提としつつ，地理的・歴史的・民族的相違を超えて，文化変化には一定の規則性を見出しうるという想定に立脚している。進化が「多線的（multilinear）」だということは，限定的かつ文化生態学的に比較可能な範囲で，ベクトルを同じくする変化が多数の文化において観察されるということに他ならない。

マーシャル・サーリンズ（Marshall Sahlins）は，全般的な文化の適応力の向上と統合レベルの高次化という意味での「進歩（progress）」を一般進化（general evolution），様々な環境への適応を通した文化の分岐的変化を「特殊進化（special evolution）」と区別する論考において，スチュワードは「『諸規則性』すなわち無関係な文化諸系統における

[5] マヤ文明のみ，熱帯雨林地域で，灌漑農業ではなく焼畑農耕を基盤に発達していたため，発達が遅れたが，長期の平和が幸いし，高度の文明を発達させえたとスチュワードは述べている（Steward 1955：199）。

平行諸発達に彼の注意を限定する（confines his attention to “regularities,” which is to say, parallel developments in unrelated cultural lines）」（Sahlines 1960 : 41）と正しく指摘したうえで, スチュワードが多線進化と名付ける過程は「壮大な進化の運動の特殊な側面（the specific aspect of the grand evolutionary movement）」（Sahlins 1960 : 44）であると断じ, レズリー・ホワイトのマクロな文化進化論と対比した。

このサーリンズの論考が収められた『進化と文化』（Sahlins and Service 1960）に寄せた前言において，レズリー･ホワイトは，上記のサーリンズの議論を次のように乱暴に，しかも誤って紹介している（White 1960 : ix）:

> Shalins’ distinction between specific and general evolution should also help to end the inane debate about unilinear（or universal）evolution vs multilinear evolution. . . . As Sahlins makes perfectly clear, evolution in its specific（phylogenetic）aspect is multilinear ; evolution in its general aspect is unilinear.

確かに, サーリンズは特殊進化を系統発生的（phylogenetic）と認めているが, スチュワードの多線進化論が系統発生的だとは述べていない。系統発生的な文化の多様化は，それが環境への適応の結果であろうとなかろうと，スチュワードにとっては文化相対主義・歴史個別主義の主たる関心事であって，彼のそれではない。サーリンズは，彼が系統発生的ではない文化間に見られる規則性すなわち平行進化を多線的と名付けていると正確に理解しつつ，スチュワードが禁欲的に極めて限定された範囲で実証可能な平行進化のみを取り上げたがゆえに, スチュワードの多線進化を「壮大な進化の運動の特殊な側面」と評したのであろう。

ところが，ホワイトの前言の影響力が大きかったためか，スチュワードの多線進化はサーリンズの言う特殊進化だという誤解が広まった。そのように紹介している教科書も少なくない。日本においては，特に “multilinear” が「多系」と訳されたがために，この誤解が増幅されたと筆者は考えている。

スチュワードの多線進化論も，彼が単線進化と名付けるモルガンやタイラーらの進化論も，進化を「直線的（linear）」に捉える点は共通している。違いは，スチュワードが方向性を異にする変化のベクトルを多数（multi）想定しているのに対して，モルガンやタイラーは変化のベクトルを単数（uni）想定している点にある。文化の多様性と規

則性（変化の平行性）とを同時に説明しようとするのが多線進化論であり，文化の多様性を単一の直線に位置付けるのが単線進化論だということになる。

Ⅱ　地域研究と近代化論

初期文明の多線進化論で「複雑社会（complex society）」の研究に着手したスチュワードは，第二次世界大戦後，その視野を現代世界へと広げていく。最初に取り組んだのがプエルトリコ研究であり，次いで伝統社会の近代化に関する研究であるが，そのためには人類学の伝統的なコミュニティ研究あるいは部族社会研究とは異なる視点と方法が必要となった。そこでスチュワードが提唱したのが,「地域研究（area research）」であった。

地域研究は，第二次世界大戦後の時代的要請，とりわけ大戦後「西側」資本主義陣営を率いて「東側」社会主義陣営と対峙したアメリカ政府の戦略的要請にも応えるものであった。人類学を含めた社会科学の経験性と客観性にこだわり続けたスチュワードが，どこまで地域研究の政治性を自覚していたかは不明であるが，彼の提唱する地域研究が時代的かつ戦略的要請に応えうるものであったからこそ，プエルトリコ研究や伝統社会の近代化研究に大型の研究助成を受けることができたのは確かであろう。

1．地域研究の提唱

1950 年に刊行された『地域研究―理論と実践』（Steward 1950）という小冊子は，アメリカの社会科学研究協議会（Social Science Research Council，以下 SSRC）が 1946 年に設置した世界地域研究委員会（Committee on World Area Research）の要請によって執筆されたものである。スチュワードが選ばれたのは，彼が指揮するプエルトリコ研究が地域研究の代表とみなされたからである（Webbink 1950 : viii）。

SSRC の委員会名にも「世界地域（world area）」という用語が使われているが，この概念は，スチュワードによると「世界的な重要性（アメリカ合衆国の国際諸関係における重要性）を有する地域，たとえばロシア，極東，南アジア，あるいは東欧（an area of world importance（importance to the United States in its international relations), such as Russia, the Far East, South Asia, or Eastern Europe）」と定義される（Steward 1950 : 7）。つまり，アメリカ政府にとって戦略的に重要な地域ということだ。スチュワードは,「共産主義の拡散が抜本的な文化変化を引き起こす危険に我々は晒されているという一般的

な認識が今日存在するようだ（The general assumption today seems to be that we are in danger of basic cultural change caused by the spread of communisim）」とも述べている（Steward 1950：105）。ファシズムに代わる共産主義の脅威が，地域研究を要請しているとスチュワードも認識していたわけである。

だが，スチュワードは，これ以外の地域概念もありうると言う。ラテンアメリカや近東，中米といった「文化領域（culture area）」[6] も地域だし，中国やロシアなどの国家（nation），アフリカなどの西洋列強の植民地（colony），あるいはアメリカの支配下にあるプエルトリコのような保護領（dependency）も地域だ（Steward 1950：7）。地域研究の単位は，研究目的に応じて様々なレベルで設定できるわけである。

いずれにせよ，地域研究（area research）の目的は，以下の 4 つである（Steward 1950：2）：

（1）　To provide knowledge of practical value about important world areas ;
（2）　To give students and scholars an awareness of cultural relativity ;
（3）　To provide understanding of social and cultural wholes as they exist in areas ;
（4）　To further the development of a universal social science.

第一に，重要な「世界地域」について「実践的な価値のある知識（knowledge of practical value）」を提供すること。これは，第二次世界大戦中からアメリカ政府の課題となっていた問題である。たとえば日本との戦争および戦後の占領統治においては日本人と日本文化についての「実践的な価値のある知識」が求められたが，それを提供できる人材も教育機関も皆無に近かった。第二次世界大戦後は，ロシアや東欧，中国など社会主義圏について「実践的な価値のある知識」が必要となった。東西冷戦下において，「世界地域」について「実践的な価値のある知識」を蓄積し，政治家や軍人に提供することは，喫緊の課題となったのである。

第二に，地域研究に従事する学生と学者に「文化の相対性」を自覚させること。ボアズ学派の文化相対主義と歴史個別主義に批判的なスチュワードが，これを第二に挙げて

[6] “culture area” は，文化要素を共有する文化的な同質性の認められる領域圏を指してアメリカ人類学で古くから使われてきた概念であり，「文化領域」と訳すのが通例となっているので，ここでも地域ではなく領域という語を使用する。

いることは注目すべき点である。文化的差異を正確に認識するには，文化の相対性の自覚が不可欠だということをスチュワードも認めていたわけであり，彼がボアズ学派を全否定してはいないことは明らかである。

第三に，地域内に存在する「社会的および文化的諸全体（social and cultural wholes）」についての理解を提供すること。これもまた，アメリカ人類学の視点である「総体主義（holism）」をスチュワードが共有していたことを意味する。また彼は，この視点が学際的な協力に不可欠だと認識していた。

そして第四に,「普遍的な社会科学（a universal social science）」の発展に寄与すること。ここでスチュワードが想定しているのは，地域の違いを超えて認められる規則性ないし法則性の探求である。

『地域研究』第 3 章「地域研究の諸概念と諸方法のいくつか」（Steward 1950：95-125）[7] で強調されるのは,「統合の諸水準（integrative levels）」（Steward 1950：106）と「発達の連続的系列（developmental continuum）」（Steward 1950：107）である。スチュワードは言う（Steward 1950：107-108）：

> Within any world area there is a developmental continuum of sociocultural wholes or systems. More complex and territorially larger systems supersede simple localized systems. In the progression from simple to complex, the earlier units and the earlier cultural practices do not entirely disapper. …
>
> …The older cultural elements, communities, and institutions have undergone qualitative changes, brought about by their functional dependence upon a new kind of whole.

局所的な社会文化システムは，より複雑で広大なシステムに組み込まれるが，その結果，その機能と役割に変化が生じるというのである。たとえば，家族というシステムは，統合の水準が低いときは自律的な生計維持システムとして機能するかもしれないが，部族あるいは国家といった統合水準の高い社会文化システムに組み込まれると，低次の水準で持っていた自立性と自己充足性を失い，より大きな全体に従属する結果，その機能が質的に変化するというわけだ。スチュワードは，こうも言う（Steward 1950：114）：

[7] この章は「地域研究の諸概念と諸方法」と題して『進化と生態』に再録されている（Steward and Murphy 1977：217-239）。

The concepts of level of organization and of developmental continuum indicate the need of recognizing that in each world area the sequences of sociocultural units consist of successions of new kinds of wholes qualitatively different from previous ones but genetically related to them. … The higher, more complex levels will require contributions from many more specialized disciplines.

明言されていないが，スチュワードの言う統合水準の高次化を伴う発達の連続的系列とは，要するに，ある特殊な多線進化の一事例のことではないか。そうすると，異なる地域における類似の事例を比較すれば，発達プロセスの規則性を析出することができるのかもしれない。後の近代化研究の原点が垣間見える。地域研究は，多線進化論の観点から，社会文化システムの統合水準の高次化とその影響を捉えるものだと言えそうだ。そして，より高次の複雑な諸水準にある社会文化システムの研究には，学際的な協力が不可欠だとスチュワードは主張する。単一の学問では「社会的および文化的諸全体」を総体的に把握することは不可能だからである。

さらに，社会文化システムの統合水準が高次化すると，局所的な諸社会あるいは諸分節を横断する社会集団ないし社会制度が出現するとスチュワードは述べる（Steward 1950：115）：

As societies become more complex, special social groups begin to cut across local societies, and formal national institutions begin to appear. The whole consists of three kinds of parts：（1）the local units, such as communities, neighborhoods, households, and other special groups, which may be called vertical divisions of the larger whole；（2）special occupational, class, caste, racial, ethnic, or other subsocieties, which like the local units, may have a somewhat distinctive way of life, but which cut across localities and may be called horizontal sociocultural segments；and（3）the formal institutions, such as money, banking, trade, legal systems, education, militarism, organized churches, philosophical and political ideologies, and the like, which constitute the bones, nerves, and sinews running throughout the total society, binding it together, and affecting it at ever point. The vertical and horizontal sociocultural subgroups make up the total social structure. The institutions as such usually do not constitute sociocultural segments,

although they affect and are affected by all segments.

素直的な分割は，低次の統合水準でも存在していた集団である。これが，大きな社会に組み込まれると，水平的な分割と交叉し，格子状の社会構造を構成する。そして，その全体が公的な諸制度によって縫合される。

この議論が，『文化変化の理論』の第3章「社会文化統合の諸水準―ある操作概念」（Steward 1955：43-63）においてさらに展開されることとなる。「国民文化（national culture）」が，第一に「科学，文学，哲学，宗教などにおける国家的諸達成（national achievements in the fields of science, literature, philosophy, religion and the like）」，第二に「国家規模で機能する統治的，経済的，宗教的および他の諸制度（governmental, economic, religious, and other institutions which function on a national scale）」，そして第三に「国家の全成員に共有される行動の共通標準（the common denominator of behavior that is shared by all members of the nation）」を包括する概念として提唱される（Steward 1955：48）。発達の連続的系列を上るにつれて，組織はより複雑化するだけでなく，新しい「創発的な諸形態（emergent forms）」が誕生すると宣言され，「創発的進化（emergent evolution）」という概念が導入される（Steward 1955：51）。ただし，「統合の諸水準という概念はいかなる特定の進化の系列を前提とするものでもない（The concept of levels of integration does not presuppose any particular evolutionary sequence）」し，「進化についての結論でもない（is not a conclusion about evolution）」（Steward 1955：51-52）。それは「通文化的比較を促進（facilitates cross-cultural comparison）」する「一方法論的道具（a methodological tool）」あるいは「一つの新しい参照枠組み（a new frame of reference）」でしかない（Steward 1955：52）。

特定の進化の系統を前提とするものではないとしても，社会文化的統合の諸水準という概念は，規模と複雑性の増大の指標であり，その高次化とともに創発的諸形態が出現する創発的進化の指標でもあるのだから，地域研究の開始とともに，スチュワードの進化観は「平行性」のみならず「創発性」をも含むようになったと見なすことができよう。もちろん，スチュワードにとって，どのようなシステム統合の高次化にともなってどのような創発的特性が発現するかは，個別の事例を通して実証されるべき問題である。この点で，彼の進化観はどこまでも経験主義的に開かれていると言えよう。

2. プエルトリコ研究

地域研究の嚆矢として知られるスチュワードらのプエルトリコ研究であるが，実際のフィールドワークとその民族誌的記述の執筆はプロジェクトに参加したコロンビア大学の大学院生たちが行なっており，スチュワード自身は全体の統括者に過ぎない。『プエルトリコの人々』の序論の執筆者はスチュワードとなっており，要約と結論はスタッフ全員ということになっているが，参加者の一人であるシドニー・ミンツ（Sydney Mintz）によると，序論[8]は彼とエリック・ウルフ（Eric Wolf）が，また結論はウルフが代筆したという（Thomas 2014：3）。末尾の第 13 章「いくつかの文化変化に関する仮説的諸規則性」では，今後比較文化的に検証されるべき仮説として変化の諸要因と諸傾向および変化の段階毎の諸特徴がプエルトリコ全体と各調査地について 10 ページにわたって種々列挙されており（Steward et al. 1956：506-512），文化的規則性の発見というスチュワードの関心が示されてはいるが，要約と結論で示された内容には実際の執筆者であるウルフの関心が色濃く反映されているように読める。

スチュワード自身は，プエルトリコ研究について，『地域研究』の第 4 章「ある地域接近法の理論と実践―プエルトリコ・プロジェクト」（Steward 1950：126-149）と『文化変化の理論』の第 4 章「国家的社会文化諸システム」（Steward 1955：64-77）で概要を述べている。

スチュワードによれば，プエルトリコ研究の目的は「一地域的全体としてのプエルトリコ（Puerto Rico as an area whole）」（Steward 1950：127）を捉え，「その全体を社会文化システムの一特殊型（the whole as a special kind of sociocultural system）」（Steward 1950：129）として概念化することであった。しかしながら，フィールドワークの対象となったのは，文化生態学的な特徴を異にする 4 つの地域共同体（垂直的分割）と，上流階級という集団（水平的分割）であり，『プエルトリコの人々』の各章は，それぞれを歴史的かつ全島的に位置付けながらも，それぞれの持つ「下位文化（subculture）」の記述となっていた。それはフィールドワークに基づく民族誌的な研究ゆえであることは確かだが，各章は生態学的特徴を異にする局所的な共同体の個別民族誌という性格が強く，「国民文化」といった概念装置を加味しても，プエルトリコを「全体」として描き出すには至っていない。プエルトリコが有機的に統合された地域体のようには見えないのである。

---

[8] この序論は「プエルトリコの人々」と題して『進化と生態』に再録されている（Steward and Murphy 1977：240-296）。

実際，この研究を通して，スチュワードが強調するのは，個々の下位文化を通しては，プエルトリコ全体についてはもちろん，個々の地域共同体の変化の原因も明らかにはできないという点である（Steward 1950 : 144）。プエルトリコにおける文化変化の主要因は島の外部に，アメリカおよびより広い世界との関係にあるからだ（Steward 1950 : 145）。

たとえば，エリック・ウルフが調査したコーヒー栽培地域では，スペイン統治時代の19 世紀前半からスペイン系エリート地主家族によって輸出作物としてのコーヒー生産に特化した規模の大きなアシエンダが形成されるとともに小農たちもコーヒー生産に従事したが，1898 年にアメリカ統治が始まると海外市場との関係の変化によって輸出作物としてのコーヒー価格が下がり，アシエンダは衰退するか，あるいは規模拡張や農民搾取の強化によって損失を吸収しようとし，小農は多様な換金作物の栽培へと転向していった（Steward et al. 1956 : 171-264）。また，シドニー・ミンツが調査したサトウキビ栽培地域では，スペイン統治時代に興隆した家族経営型アシエンダがアメリカ大資本の経営する企業型プランテーションに取って代わられ，農民と農業労働者たちのプロレタリアート化が進行した（Steward et al. 1956 : 314-417）。こうした大きな経済変化は，それぞれの地域の文化に異なる影響を及ぼしている。海外市場や外国資本，宗主国といった外部者の影響が，局所的な共同体の文化に直接的な影響を与えているのである。

しかし，そうした外部要因に目を向けながら，スチュワードはスペインやアメリカによる植民地支配や外国の大企業による支配という権力関係の構図を明確化しようとはしない，あるいはできない。外部との関係，それも支配従属関係を捉える概念装置が彼の研究枠組には欠落しているからである。

また，上流階級に注目し，島全体を覆う諸制度についても言及しているが，島内の権力関係の構造が議論の俎上に上ることもない。これも，水平的分割とか国家的諸制度といった概念が記述的なものであり，全島的なレベルの政治社会構造を把握するために必要な分析的な概念が欠落していることによる。

コーヒーや砂糖，タバコの生産技術と生産組織の変化，それらと自然環境との関係は，スチュワードの文化生態学で把握できるし，その関係と個々の地域共同体の「生の流儀（way of life）」との関係も，スチュワードの枠組みで把握できると思われる。しかし，島全体の政治社会構造と，島と外部との政治的・社会的・経済的関係の構造を把握するには概念装置が不足しているのである。ここに，スチュワードの文化生態学的アプローチからの地域研究の限界がある。

3.　近代化の比較研究

イリノイ大学における「文化的諸規則性の諸研究（Studies of Cultural Regularities）」と題するプロジェクトの一環として実施され，3 巻の『伝統的諸社会の現代的変化』（Steward ed. 1967）として成果が刊行された近代化の影響に関する比較研究も，プエルトリコ研究と同様，スチュワードは統括者に止まり，自分自身ではフィールドワークを行わず, プロジェクト参加者たちが調査と執筆を分担するという形の共同研究であった。

スチュワード自身が執筆しているのは,「近代化に関する諸観点―諸研究への序論」と題する『伝統的諸社会の現代的変化』第 1 巻の巻頭論文（Steward 1967b）と，その草稿として書かれたが出版されずに終わり,「伝統的諸社会の近代化」と題して没後に『進化と生態』に収録された論考（Steward and Murphy 1977 : 297-330）のみである。

「近代化に関する諸観点」でスチュワードは，プロジェクトの一般的な目的は「国民的諸集団の様々な伝統的，農村的な諸分節に対する近代的で産業的な世界文化の諸影響を探索すること（to investigate the effects of modern, industrial world culture on various traditional, rural segments of national populations）」であり, その基底にある問題意識は「伝統的諸社会に影響を与えた諸過程すなわち進化的な諸転換を特定すること（to determine the processes or evolutionary transformations that have affected traditional societies）」だと述べている（Steward 1967b : 1）。

スチュワードは，近代化を次のように定義する（Steward 1967b : 4）:

> Modernization is used herein to designate sociocultural transformations that result from factors and processes that are distinctive of the contemporary industrial world. … Modernization is evolutionary in that basic structures and patterns are qualitatively altered.

「基本的な諸構造と諸様式」の変質が見られるという点で，近代化とは文化進化の一種なのである。

しかし,「進化的な諸転換」とは，一般的な世界的変化の諸段階を意味するものではなく，特定諸社会の特殊な諸変化を意味するともスチュワードは言う（Steward 1967b : 4）:

> This use of evolution, however, does not imply general world stages of transformations. To the contrary, it refers to specific alterations of particular societies that must be determined empirically in each case and that may or may not be cross-culturally similar.

あくまでも多線進化論の枠組において，実証的に特定社会の特定変化に焦点を合わせると宣言している。この点で，スチュワードの近代化論は，たとえば単線進化論的で反共イデオロギーを色濃く反映したウォルト・ロストー（Walt W. Rostow）の『経済成長の諸段階―非共産党宣言』（Rostow 1960）とは性質を異にする。

スチュワードは，近代化研究のために，新たに「媒介的諸主体と諸機構（mediating agencies and mechanisms）」という概念を導入する（Steward 1967b : 14-16）。そして，外部世界に存する近代化の諸要因が，様々な諸主体と諸機構に媒介されて，伝統社会に内的な進化の過程を引き起こすとスチュワードは述べる（Steward 1967b : 16）:

> The basic factors of modernization that are mediated to the local societies through various agencies initiate internal processes of change. These processes may be designated evolutionary in that they lead to structural transformations or modifications.

内的な進化の過程がどのようなもので，どのような構造的諸転換ないし諸変容をもたらすのかを，異なる地域で異なる諸条件を抱えた諸社会の比較を通して実証的に明らかにしようとするのが，このプロジェクトの目的なのである。

『進化と生態』に収録された論考においては，内的な進化過程には，「文化生態的諸適応（cultural-ecological adaptations）」と「社会的諸適応（social adaptations）」の 2 種類があるとスチュワードは言う（Steward and Murphy 1977 : 315）。前者は基本的に自然環境への文化的な適応であるが，後者は「隣接する諸社会との適応的相互作用のために必要となる特定社会の変容（such modification of a particular society as may be required by its adaptive interactions with neighboring societies）」を指す（Steward and Murphy 1977 : 315）。近代諸文明が発達するにつれて「複雑な社会環境への適応の諸過程は変化の決定因として重要度を増している（the processes of adaptation to the complex social environment become more important determinants of change）」のである（Steward and Murphy 1977 : 315）。

さらに，この論考では進化の諸過程（processes）とはどういうものかが次のように説明される（Steward and Murphy 1977：311）：

> Processes have been defined . . . as the ways in which factors in the social context, especially factors of alien origin within the colonial or national context, operate to bring about transformations in the traditional society.

したがって，近代化の比較研究が注目すべきは，所与の社会的文脈にいかなる変化の諸要因，とりわけ外来の諸要因が存在し，それらがどのように伝統社会に諸変容をもたらすかということになる。なお，これらの諸要因は理論的に想定されるべきではなく，あくまでも実証的に調査を通して見出されるべきものである。

そして，変化の諸過程には，諸要因のもたらした諸影響が最終的に生んだ結果すなわち「到達点（culmination）」が認められるとスチュワードは言う（Steward and Murphy 1977：312）。たとえば，市場経済に巻き込まれた伝統社会において，生産と所有の個人化という過程が最終的に生産手段の私的所有という到達点に至るという具合である。

到達点が明確であれば，すなわち変化の過程が完結していれば，その到達点に至った過程でどのような諸要因がどのように働いたかを明らかにすることはできるかもしれない。しかしながら，スチュワードによると，非西欧諸社会における近代化のように変化過程の「初期の（incipient）」段階にある変化については，変化過程の性質の研究は推測的にならざるをえない（Steward and Murphy 1977：312）。

そう論じたうえで，スチュワードは，近代化の諸過程について，レッドフィールドが提起した個人化（individuation）・脱組織化（disorganization）・世俗化（secularization）の検討から始めて，商業化（commericialization），学校教育化（education），派閥分化（factionalization）といった近代化に伴う諸過程とその影響を考察している（Steward and Murphy 1977：318-323）。そして，これらの諸過程の帰結の一つとして，農村において親族組織と生産関係が変容し，核家族が生産と消費の単位となる傾向が見られることなどを指摘している（Steward and Murphy 1977：321）。

しかしながら，「近代化に関する諸観点―諸研究への序論」と題して出版された『伝統的諸社会の現代的変化』第 1 巻の巻頭論文においては，こうした議論は簡略化され，以下のように概念化と理論化の不足が指摘される（Steward 1967b：16, 強調は引用者）：

> The more basic processes of change include a wide variety of transformations that are caused by institutional factors. This causal aspect of process has not been clearly conceptualized nor have the more substantive processes been distinguished by appropriate terms. *"Secularization," "individuation," and many other terms are too general to have substantive meaning. For such a fundamental process as that through which a society becomes a specialized dependency of a larger sate there is no term.*

近代化の比較研究が対象としたのは，アフリカ（ケニア，タンザニア，ナイジェリア）の3つの「部族（tribe）」，東南アジア（ビルマ，マレーシア）と日本（大阪市近郊と宮城県北部）[9] の4つの「農村社会（rural society）」，そしてラテンアメリカ（メキシコとペルー）の3つの先住民「共同体（community）」である。それぞれ歴史的条件も地理的条件も政治的条件も大きく異なり，アフリカと東南アジア，ラテンアメリカについては植民地化の状況も大きく異なる。そのように多様な社会的文脈に共通する近代化の規則性を見出そうというのが，スチュワードの意図であった。

『進化と生態』に収録された論考には，次のような結論めいた文章が見られる（Steward and Murphy 1977：326）：

> Within the grate range of variation of our cases, two important differences must be taken into account. First, a far larger number of factors have entered the context of Japan, as in other industrialized nations, than some of the newly emerging nations. Japan has been able to incorporate more features of the larger, industrial world culture. Second, the effectiveness of potential factors in any given contest may range from near zero through varying degrees of culmination.

日本の農村では最も近代化の諸過程が進行しており，その結果，最も近代化の到達点に近づいている。しかしながら，その他のアフリカ・アジア・ラテンアメリカの伝統諸社会では，ビルマの農村のようにほとんど近代化の諸過程が進入しておらず，近代化の諸要因の効果がゼロに近いところから，タンザニアの部族社会のように富の不足から近代

[9] 日本の2村落の調査を担当したのは米山俊直である。

化の諸過程が初期段階に留まっているところ，ペルーの先住民社会のように伝統的な諸要素を残しながらアシエンダやプランテーションにも足を踏み入れているところ，ナイジェリアの部族社会のように近代化の諸要因に無関心に見えるところなど，様々な阻害要因の影響で近代化の到達点に近づく程度には差があるとスチュワードは述べる（Steward and Murphy 1977 : 326-329）。

そのうえで，スチュワードは以下のようにまとめる（Steward and Murphy 1977 : 329）:

> Despite all these factors which inhibit the effectiveness of potential processes of change, our comparisons make it obvious that a fairly small number of economic influences have great effect. Different kind of involvement in a market economy and local potentials for production of wealth repeatedly generate similar processes. These are enhanced or retarded by the traditional culture, by government policies, by a multiple society, by education, by mission training, and by other factors not wholly understood.

外部からの経済的影響，特に市場経済への組み込みと，当該社会の潜在的な生産力とが，類似した近代化の諸過程を生み出し，その成否は他の多様な諸要因の影響に左右されるというわけだが，大規模な民族誌的比較研究の結論としては，あまりにも茫漠としており，規則性の探究の成果としては物足りないと言わざるをえない。少なくとも『プエルトリコの人々』の最終第 13 章のような仮説的諸規則性の提示が欲しかったところだ。

スチュワード自身，明快な結論は出せないと自覚していたようで，「近代化に関する諸観点―諸研究への序論」においては，草稿に残る上記の記述も削除されており，具体性を欠いた主張のみが目立つ。一例を挙げると（Steward 1967b : 19）:

> It is clear that many factors of modernization have been operating in widely separated parts of the world. They are causing certain foreseeable convergences among dissimilar traditional groups and perhaps parallel developments among types that were cross-culturally similar.

それではどのような「予見可能な諸収斂（foreseeable convergences）」が見出され，ど

のような「文化類型（cultural type）」においてどのような平行諸発達（parallel developments）」が認められるのか，具体的な説明は全く見られない。

スチュワードは，『伝統的諸社会の現代的変化』第1巻の「前言」において，こう述べている（Steward 1967a：ix，イタリック体は原文）：

> I had originally planned . . . to postulate tentative explanatory formulations of the substantive results of the field work as a concluding section of the third volume. Discussion with project members subsequent to the research, careful analysis of the manuscripts, and consideration of the larger implications of our project, however, made it very evident that adequate treatment of modernization must involve the larger dimensions of any culture change and that explanatory formulations of change would have to include far more cases than those studied by our project. What had been intended as reasonably brief statements, therefore, will be made into a separate book that will enlarge and supersede my *Theory of Culture Change*（1955）.

結論が出せないことの弁明とも取れるが，スチュワードの偽らざる気持ちの表明でもあろう。ここで予告された『文化変化の理論』改訂版は，「近代化に関する諸観点」でも予告されているのだが（Steward 1967b：4），ついに世に出ることはなかった。

スチュワードの近代化論は，未完に終わったのである。

Ⅲ　ジュリアン・H・スチュワードにおける「文化」と「文明」

スチュワードの「文化」概念の特徴は，生態学的な観点から資源利用，とりわけ食糧獲得の技術と組織を重視する点にある。これは，狩猟採集社会の分析には有効な概念であった。その妥当性はともかく，たとえば父系バンドの文化核についてのスチュワードの仮説は，彼が集め得た限りでの民族誌的情報に基づいて具体的に定式化されており，さらなる調査研究によって検証可能な形で提案されている。実際，様々な検証が行われ，数多くの批判と反論が提起された。この点についてはサービスの文化進化論を取り上げる次稿で改めて論じたい。

しかし，文化核と文化類型といった概念は，より複雑な社会の分析，たとえば初期文

明の発達過程の分析には必ずしも十分とは言えない。そのためか，『進化と生態』に収録された 1968 年初版の「文化生態学の諸概念と諸方法」(Steward and Murphy 1977 : 43-57）においては，文化核も文化類型も重要な概念としては用いられていない。これを後藤明（2005）はプエルトリコ研究と近代化研究を踏まえた理論的発展と肯定的に捉えるが，マーフィーらによると『文化変化の理論』出版直後からの「技術環境決定論的過ぎる（too techno-environmental)」というマーフィとエリック・ウルフらによる批判を受けてのことだという（Kerns 2003 : 303)。

プエルトリコ研究と近代化研究においては，統合のレベルの高次化した社会文化システムを人類学的に捉えるべく「国民文化」の概念が提唱された点が新しい。これは国家レベルにおける諸制度と全国民に共通する行動様式とを含むものであるが，分析的・理論的な役割が与えられた文化核や文化類型の概念とは異なり，あくまでも記述的な概念に止まった感が否めない。後述するように社会文化統合のレベルという概念は文化進化論の新展開に寄与することとなったが，文化概念の理論的発展には必ずしもつながっていないと言わざるをえないだろう。その原因は，スチュワードが文化を基本的に「生の流儀（way of life)」と捉える視点を地域研究においても持ち続けたことにありそうだ。

スチュワードの「文明」概念は，初期文明にせよ近代産業文明にせよ，記述的な概念としてしか用いられていない点にその特徴がある。ロバート・レッドフィールドやレズリー・ホワイトのように，未開社会との対比において文明を概念化しようとはしていないのである。それは，スチュワードの文化生態学的な多線進化論が，禁欲的なまでに限定的な平行進化を主題としたからであろう。文明論あるいは文明批評の不在は，スチュワードにおいて顕著である。それは彼がどこまでも「科学的」な人類学の構築と，文化の規則性についての検証可能な仮説の提示を志向したからだと思われる。

Ⅳ　ジュリアン・H・スチュワードの学説上の位置

ロバート・マーフィによると，スチュワードの最大の学説史的貢献は文化生態学の提唱にある(Murphy 1977, 1981)。この評価は衆目の一致するところであろう。スチュワードの文化生態学を批判的に継承する形で，生態学的人類学は多様に発展してきた。

特に，1960 年代にはスチュワードの文化生態学を批判的に継承発展させた研究が続出する。ウェイン・サトルズ（Wayne Suttles）のポトラッチ研究（Suttles 1960)，マーヴィ

ン・ハリスのインドの聖牛研究（Harris 1966），ロイ・A・ラパポート（Roy A. Rappaport）のニューギニア高地人の儀礼研究（Rappaport 1968），アンドリュー・P・ヴェイダ（Andrew P. Vayda）の戦争研究（Vayda 1969）などが，その代表である。これらの研究の批判と論争を通して，生態人類学は発展する（Vayda and McCay 1975 ; Kottak 1999）。

マーヴィン・ハリスは，その後さらに独自の「文化唯物論（cultural materialism）」を展開し，一般向けの著作を多くものしたこともあって，1970 年代から 80 年代にかけて一世を風靡した（Harris 1974, 1977, 1979, 1985）。スチュワードの文化生態学は文化唯物論だと彼は主張する（Harris 2001［1968］: 654）:

> It can be shown that Steward has led his contemporaries in actually applying cultural-materialist principles to the solution of concrete questions concerning cultural differences and similarities. . . . Steward has sought to identify materialist condition of sociocultural life in terms of the articulation between production processes and habitat.

このような解釈にスチュワード自身が同意するかどうかはわからないが，スチュワードの文化生態学，特に「文化核」の概念をより唯物論的あるいは技術環境決定論的に展開すればハリス流の文化唯物論に到達すると言えるのではなかろうか。

筆者としては，スチュワードの「社会文化統合の水準」概念の貢献を評価したい。この概念は，サーリンズによって一般進化の指標とされたし（Sahlins 1960），サービスによって社会組織の進化段階の指標とされた（Service 1962, 1971）。サービスが提唱したバンド→部族→首長制→未開国家という社会組織の進化図式は，アメリカの文化人類学と考古学において広く受容され，特に考古学において活用されてきた。またスチュワードの多線進化論的な国家の起源論は，サービスに批判的に継承されることとなる（Service 1975）。ジュリアン・スチュワードからエルマン・サービスへという文化進化論の展開は，次稿の検討課題となる。

地域研究と近代化論においては，レッドフィールドからスチュワードへという流れを認めることができる。スチュワードは，ややもすれば人文主義的でロマン主義的なレッドフィールドの文明論を検証可能な社会科学的諸仮説へと落とし込もうとしたのではないか。しかし，その企ては残念ながら未完に終わった。その原因は，スチュワードの文化生態学の理論的限界にあると言えよう。生業と環境の相関関係の分析に主眼を置くだ

けでは，プエルトリコのようなローカルな複雑社会，さらにはグローバルな資本主義体制の「進化」の研究には不十分であったと言わざるをえない。特に，権力と支配の構造という視点がスチュワードの文化論に欠けていたことが，彼の地域研究と近代化研究の限界になったと筆者は考える。その克服は，コロンビア大学時代のスチュワードの学生であり，プエルトリコ研究にもフィールドワーカーとして従事したエリック・ウルフとシドニー・ミンツらの人類学的政治経済学（anthropological political economy）に委ねられることとなる（Wolf 1997［1982］; Mintz 1985）。

最後に，スチュワードの多線進化論は，後藤明（2005）が指摘するように，ボアズの文化相対主義と歴史的個別主義の発展と見なすことができる。レズリー・ホワイトのようにやみくもにボアズを否定することなく，文化の多様性と多数性を説明しうる進化論を主張したところに，スチュワードの独創性があったし，だからこそ彼の多線進化論は脚光を浴びたのである。

お　わ　り　に

本稿を結ぶにあたり，ジュリアン・スチュワードの現代的意義を考えてみたい。筆者が注目するのは，近代化研究において彼が提起した文化生態的適応と社会的適応および進化過程と到達点という概念の適用可能性である。

地球温暖化と気候変動という未曾有の環境変化は，文化生態的な一大適応不全と言えるのではなかろうか。しかも，この適応不全は，国民国家の枠組みを脱却できない国際社会の社会的適応不全によって悪化している。人類社会は，新たな文化生態的適応と社会的適応とを要請されているのである。それも，個別社会の適応ではなく，人類社会全体としての適応である。エネルギー利用の脱炭素化は，世界各地で進行する様々な環境変化への文化生態的適応を可能とするに十分なのだろうか。それとも，エネルギーに限らず，資源利用の抜本的変革が必要なのだろうか。そうだとしたら，そのような変革を可能とする諸要因は，果たして現代世界の文脈に存在するのだろうか。また，求められる文化生態的適応に不可欠な社会的適応を，国際社会は実現できるのだろうか。

新型コロナウイルス感染症というパンデミックもまた然りである。本稿執筆時点では，このパンデミックに対する文化生態的適応も社会的適応も国際社会は達成していないように思える。とりわけ，国民国家の存在が国際的な社会的適応を阻害していると言えそ

うだ。その克服を可能とする諸要因は，果たして現代世界の文脈に存在するのだろうか。

現代世界が進化過程の最中にあると捉えるなら，現在進行中の諸過程の到達点はどこにあるのだろうか。それは致命的な環境破壊なのだろうか。それとも，真にグローバルな政治社会体による文化生態的適応の達成なのだろうか。どちらに進みつつあるのか，どれほど推測的であっても，可能な限り実際的な社会科学的展望を提示する義務が，我々に課せられているのではないだろうか。それは，独創的な天才が単独に果たしうる義務なのか，はたまた無数の研究者が集合的に果たさなければならない義務なのか。後者だとしたら，現代の社会科学は，グローバルな協働による集合知の生成を可能とする状況にあるか。冷静に客観的に見極めよというスチュワードの声が聞こえてきそうである。

引　用　文　献

後藤明

2005「J. スチュワードの文化生態学再考―近代化による社会変化論と人類学的地域研究の先駆者として」『現代社会フォーラム』（同志社女子大学社会システム学会）1：12-20。

Harris, Marvin

1966 “The Cultural Ecology of India’s Sacred Cattle.” *Current Anthropology* 7：51-60.

1974 *Cows, Pigs, Wars, and Witches：The Riddles of Culture*. New York：Random House.

1977 *Cannibals and Kings：The Origins of Cultures*. New York：Random House.

1979 *Cultural Materialism：The Struggle for a Science of Culture*. New York：Random House.

1985 *Good to Eat：Riddles of Food and Culture*. New York：Simon and Schuster.

2001［1968］*The Rise of Anthropological Theory：A History of Theories of Culture, Updated Edition*. Walnut Creak, Lanham, New York, Oxford：Altamira Press.

Kerns, Virginia

2003 *Scenes from the High Desert：Julian Steward’s Life and Theory*. Urbana and Chicago：University of Illinois Press.

Kottak, Conrad P.

1999 “The New Ecological Anthropology.” *American Anthropologist* 101：23-35.

Manners, Robert A.

1996 *Julian Haynes Steward：January 31, 1902-February 6, 1972*. Washington, D.C.：National Academies Press. http://www.nasonline.org/publications/biographical-memoirs/memoir-pdfs/steward-julian.pdf

Mintz, Sidney W.

1985 *Sweetness and Power：The Place of Sugar in Modern History*. New York：Penguin Books.

Murphy, Robert E.
1977 "Introduction : The Anthropological Theory of Julian H. Steward." Pp.1-39 in Steward, Jane C. and Murphy, Robert E. (eds.), *Evolution and Ecology : Essays on Social Transformation by Julian H. Steward*. Urbana, Chicago, London : University of Illinois Press.
1981 "Julian Steward." Pp.171-206 in Silverman, Sydel ed., *Totems and Teachers : Perspectives on the History of Anthropology*. New York : Columbia University Press.

沼崎一郎
2020 「ロバート・レッドフィールドにおける『文化』と『文明』―『郷民社会』論から『人類史』論へ」『東北大学文学研究科研究年報』69 : 211-242。
2021 「レズリー・A・ホワイトにおける『文化』と『文明』―『進化』と『革命』の普遍史」『東北大学文学研究科研究年報』70 : 208-240。

Rappaport, Roy A.
1968 *Pigs for the Ancestors : Ritual in the Ecology of a New Guinea People*. New Havens, CT : Yale University Press.

Rostow, Walt W.
1960 *The Stages of Economic Growth : A Non-Communist Manifesto*. Cambridge : Cambridge University Press.

Sahlins, Marshall D.
1960 "Evolution : Specific and General." Pp. 12-44 in Sahlins, Marshall De. and Service, Elman R. (eds.) *Evolution and Culture*. Ann Arbor : The University of Michigan Press.

Sahlins, Marshall D. and Service, Elman R. (Eds.)
1960 *Evolution and Culture*. Ann Arbor : The University of Michigan Press.

Service, Elman R.
1962 *Primitive Social Organization : An Evolutionary Perspective*. New York : Random House.
1971 *Primitive Social Organization : An Evolutionary Perspective*, 2nd edition. New York : Random House.
1975 *Origins of the State and Civilization : The Process of Cultural Evolution*. New York : W.W. Norton and Company, Inc.

Steward, Jane C. and Murphy, Robert E. (Eds.)
1977 *Evolution and Ecology : Essays on Social Transformation by Julian H. Steward*. Urbana, Chicago, London : University of Illinois Press.

Steward, Julian H.
1936 "The Economic and Social Basis of Primitive Bands." Pp.331-50 in Lowie, Robert H. ed., *Essays in Anthropology : Presented to A.L. Kroeber in Celebration of His Sixtieth Birthday, June 11, 1936*. Berkeley : University of California Press.
1950 *Area Research : Theory and Practice*. New York : Social Science Research Council.
1967a "Forward." Pp.v-x in Julian H. Steward (ed.), *Contemporary Change in Traditional Societies Volume I : Introduction and African Tribes*. Urbana, Chicago, and London : University of Illinois Press.

1967b “Perspectives on Modernization : Introduction to the Studies.! Pp.1-55 in Julian H. Steward（ed.）, *Contemporary Change in Traditional Societies Volume I : Introduction and African Tribes*. Urbana, Chicago, and London : University of Illinois Press.

1972［1955］ *Theory of Culture Change : The Methodology of Multilinear Evolution*. Urbana : University of Illinois Press.

Steward, Julian H.（Ed.）

1967 *Contemporary Change in Traditional Societies*, 3 volumes. Urbana, Chicago, and London : University of Illinois Press.

Steward, Julian H., Manners, Robert A., Wolf, Eric R., Seda, Elena Padilla, Mintz, Sidney W., Scheele, Raymond L.

1956 *The People of Puerto Rico : A Study in Social Anthropology*. Urbana : University of Illinois Press.

Suttles, Wayne

1960 “Affinal Ties, Subsistence, and Prestige Among the Coast Salish.” *American Anthropologist* 62 : 296-305.

Thomas, Jonathan T.

2014 “And the Rest is History : A Conversation with Sidney Mintz.” *American Anthropologist*, 116（3）: 1-14. DOI:10.1111/aman.12118

Vayda, Andrew P.

1969 “Expansion and Warfare Among Swidden Agriculturalists.” Pp. 202-220 in Vayda, Andrew P.（ed.）, *Environment and Cultural Behavior : Ecological Studies in Cultural Anthropology*. Garden City, NY : Natural History Press.

Vayda, Andrew P. and McCoy, Bonnie J.

1975 “New Directions in Ecology and Ecological Anthropology.” *Annual Review of Anthropology* 4 : 293-306.

Webbink, Paul

1950 “Forword.” Pp.vii-ix in Steward, Julian H., *Area Research : Theory and Practice*. New York : Social Science Research Council.

White, Leslie A.

1960 “Forward.” Pp.v-xii in Sahlins, Marshall De. and Service, Elman R.（eds.）*Evolution and Culture*. Ann Arbor : The University of Michigan Press.

Wolf, Eric R.

1997［1982］ *Europe and the People without History, with a New Preface*. Berkeley, Los Angeles, London : University of California Press.

"Culture" and "Civilization" in the Thought of Julian H. Steward : From "Multilinear Evolution" to "Modernization"

NUMAZAKI Ichiro

The purpose of this paper is to elucidate Julian H. Steward's conception of "culture" and "civilization" by examining his theories of multilinear evolution and modernization.

In contrast to biological evolution, which essentially treats evolution as divergent branching of genetically related species, Steward developed his theory of multilinear evolution as a methodology to study empirically observable parallel evolution of unrelated and different cultures. He maintained that for carefully selected cultures that have similar conditions will go through similar processes of evolutionary change and result in a similar sociocultural transformation or modification. He revived the comparative method, which was criticized and denied by Boas and his students as unjustifiable methods of anthropological study of change.

Steward's multilinear evolution was premised on his theory of cultural ecology that focused on the interactions between a particular set of environmental factors and a particular set of key cultural traits, including productive technology, social and political relations, as well as religious beliefs and practices, which were important for exploitation of resources — the cultural core as he called it. He insisted that cultural type consisting of similar cultural cores ought to be the focus of cultural ecological analysis.

Steward later engaged in area research and conducted systematic study of Puerto Rico as an area whole, and further organized a comparative study of the impacts of modernization on various traditional societies. In so doing, he developed the concept of levels of sociocultural integration based on the different degrees of organizational complexity. He also expanded the scope of his cultural ecology and added inter-societal adaptations to natural-environmental adaptations in his study of evolutionary transformation of traditional societies under the impact of modern industrial culture of the capitalist world.

Steward's concept of culture is unique in its emphasis on adaptation and was quite useful in the cultural ecological studies of simple societies, but it was insufficient for the study of more complex societies and their evolutionary transformations. His concept of civilization is purely descriptive and void of any ideological or critical components. As a pure social "scientist," Steward avoided any broad contrast of civilization and primitive culture and abstained from any civilizational critique in the manners of Robert Redfield or Leslie White.